

するもの、賦存量は少ないのに他と同じように扱っているものなど、実現性に疑問がある。とはいえ、環境問題を中心に考えると、緊急性はきわめて高く、身近なところからできることに取り組む必要がある。当部会で検討・評価した中で、次の3分野について要望・意見が示された。

(計画性)

- ・計画段階でのベースになる数値を十分に吟味し、市民に公表すること。
- ・計画作成後、市民や専門家の意見を反映し、計画を見直す作業を繰り返すこと。
- ・年度ごとの目標を作成し、実践、検証を繰り返すこと。
- ・リスクを避けるために、全市的に展開する前にはモデル地区での実践を行ってから本格施設を建設すること。
- ・それぞれの地域に適した取組みを行うこと。(例、生ごみの資源化は意欲のある地区から始める)
- ・物によっては自己完結する必要はなく、他市等との協力を視野に入れること。

(安全性)

- ・生ごみを堆肥化するに当たり、製品の中には生ごみの無分別による異物の混入を避け、安全かつ品質の良い肥料を作ることに努力すること。また、下水処理から発生する汚泥には、重金属などの混入が懸念されることから、堆肥化する場合には性状分析や重金属の除去など安全に十分注意すること。

(合意形成度)

- ・今の状況では、市民は地球温暖化やバイオマスタウンに対する認識は低い。また、認識していたとしても行動に結びついていないため、合意形成度は低いと言える。
- ・市民に対する働きかけが不足しており、学習の場あるいは市民の参加意識向上・普及についての具体的な取組みとして、市民向けのフォーラムの開催や出前講座などを通じ、積極的に働きかけること。
- ・農業従事者の高齢化による労力不足やコストの問題もあり、堆肥利用については需要と供給のバランスをもっと検証すること。

③焼却場、し尿・下水処理施設などへの取組み

- ・老朽化や処理能力の不足が著しいため、すぐに取り掛かること。
- ・本市で多いバイオマスは一番が汚泥系廃棄物、その次に食品廃棄物と続くので、この二つから重点的に取り組むこと。また、食品廃棄物は市民に身近なものであり、当部会が市民の意識向上に関わっていけるところでもあるので、優先的に行っていくのが望ましい。
- ・施設の統廃合やエネルギーの相互利用など施設間の連携を図り、有利な補助金の活用を図ること。

④民間の取組みの現状と課題

(有機栽培)

- ・労力を使って有機栽培で農作物を作っても、労力に値する評価が得られる保証はなく、また農業従事者の高齢化のため、有機栽培は広がりにくい。
- ・消費者に有機農産物、無農薬、減農薬の違いや有機野菜の良さを知ってもらいたい。

(マイバッグ)

- ・バイオマスタウンを進めていくと共に、マイバッグ運動も身近なエコ活動として、市が推進すべき。
- ・スーパーマーケットや企業へ呼びかけのほか、マイバッグを作成し提案したこともあるが、普及には至らなかった。
- ・すでに9割マイバッグの利用を実践している自治体もあるが、市内ではまだまだ普及していない。

(廃油リサイクル)

- ・廃油リサイクルもマイバッグと同じく一部の地区でモデルケースとしてのみ取り組まれている。全市的には減量のPRも含め、収集・利活用に関する組織づくりが必要。

(地域及び子ども会)

- ・地域によっては廃油から石鹸を作成したり、子ども会の活動としてアルミ缶の回収を定期的に行っており、そこでの収益を子どもたちに還元するなどして、子ども会活動を活発にすることで、子どもの社会参加の場の提供に貢献しているところもある。

(休耕田)

- ・本市には休耕田が多いので、地産地消のため活用できる新たな仕組みができないだろうか。

(環境実践PRセンター(仮称))

- ・論議を深めていく中で、人が集い、情報を持ち寄る仕組みの必要性を感じた。仮に「環境実践PRセンター」と呼び、「興味・関心のある市民の参加」を生かす仕組みである。これからは、興味・関心のある市民が気軽に、自由に立ち寄り、参加することのできる場所作りを進め、身近なところからの環境問題への取組みやまちづくりが活発になることを目指していく。その機能を示すと、次のとおりである。